

フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（第 24 期・第 1 回）
議事要旨

開催日時： 平成 30 年 5 月 17 日（木）15：10～17：07

開催場所： 日本学術会議 5－C（2）会議室（5 階）

出席者：氷見山幸夫、日置光久、山形俊男、小金澤孝昭、小松輝久、田中邦明

配布資料：

資料 1：分科会設置提案書

資料 2：分科会委員名簿

資料 3：前期最終分科会（2017 年 9 月 3 日）の議事要旨

参考：委員会等の議事要旨の公開等に関するガイドライン

議事：

（1）分科会役員の選出と承認

- ・事務局の進行により、出席委員数が定足数を満たしていることを確認、出席委員の自己紹介の後、分科会委員長に氷見山幸夫委員を選出した。以後の議事は氷見山委員長が議長を務めた。
- ・委員長より副委員長に小松輝久委員を、幹事として福士謙介委員と鈴木康弘委員を指名したい旨提案があり、これらを承認した。なお福士委員と鈴木委員は欠席のため、委員長が両委員にこの件を速やかに伝え、了承を得ることとした。
- ・議事要旨の作成は原則として幹事に委嘱することとした。なお本日は幹事不在のため、小松委員に委嘱。
- ・日本学術会議における委員会等の議事要旨の公開等に関するガイドライン（参考資料）について確認し、3 週間を目処に次の手順で議事要旨を作成し、学術会議事務局に提出するよう努めることにした。

- ① 議事要旨作成者は委員会開催後 1 週間以内に要旨案を作成し、委員長に送付する。
- ② 委員長は要旨案を速やかに確認・修正し、要旨作成者に返送する。
- ③ 議事要旨作成者は要旨案を各委員に送付し、1 週間以内に修正意見を集約する。
- ④ 議事要旨作成者は修正意見を反映した要旨案を委員長に速やかに送付する。
- ⑤ 委員長は要旨案を確認・修正し、議事要旨作成者に返送する。
- ⑥ 議事要旨作成者は修正した要旨案を各委員に送付する。
- ⑦ 委員長は、委員会出席委員全員の確認後、委員長の責任において、学術会議事務局に議事要旨を送付する。

（2）前期分科会の申し送り事項

- ・資料 3 に基づき前期分科会の申し送り事項を確認し、共有した。

(3) 分科会に関する国際的・国内的動向

以下について情報を共有し、議論した。

- ・山形委員：親委員会では、学会のような **Future Earth Society** を立ち上げるという提案があった。賛否両論あり話は進んでいない。
- ・氷見山委員長：財政的に自立し、**Future Earth (FE)** に取り組んでいる既存の国際的な **Union** や国内の学会・大学などがあるので、そのような組織との連携を強める方が効果的である。
- ・氷見山委員長：**FE** は当初教育にあまり熱心ではなかったが、初代の **Director Paul Shrivastava** は来日して教育の重要性を理解し、日本の **Hub** が世界の **FE** の教育人材育成の **Core** になることを勧めた。**FE** は理念的には **Bottom up** を重視しており、教育関係のネットワークを利用できる。
- ・氷見山委員長：2018 年にドイツ地理学会会長の **Prof. Benno Werlen (Friedrich Schiller University Jena)** が **UNESCO** により **Global Understanding for Sustainability** の **Chair** に任ぜられた。また、**International Geographical Union (IGU)** は、2016 年の **International Year of Global Understanding (IYGU)** の終了後も **Global Understanding** の取り組みを継続し、教育に関して **FE** をボトムアップで支える予定である。2018 年 6 月 30 日パリ時間 9 時に **International Council for Science (ICSU)** と **International Social Science Council (ISSC)** が合体して **International Science Council (ISC)** が発足し、7 月初めにパリで第 1 回総会がある。
- ・小金澤委員：日本には現在 1100 の **UNESCO** スクールがあり、改定された学習指導要領に内容が書き込まれた。**UNESCO** スクール支援大学間ネットワークに加盟する大学は 13 大学ある。**Education for Sustainable Development (ESD)** には各地方の支援センターを中心に取り組んでおり、**FE** の教育人材育成にリンクできる。また、日本 **ESD** 学会が、2017 年 4 月にでき、会員は約 200 名、2018 年 8 月 18-19 日に奈良教育大学で発表大会があり、50 程度の発表申し込みがある。
- ・日置委員：来年度、海洋教育学会をつくる動きがある。しかしこれは子どもの能力開発を目指すものでなくてはならず、研究者だけではなく現場のリーダー的な先生方にしっかり入ってもらい新しい形のことを考えなければならない。

(4) 今期の分科会の活動方針

- ・氷見山委員長：分科会には小委員会を置いて具体的な活動を推進することができる。
- ・日置委員：現場の先生に入ってもらって、**Glocal** に動く必要がある。志があり能力のある先生に入ってもらいコミットできる小委員会はつくれないか。
- ・日置委員：経済協力開発機構(**OECD**)の学習到達度調査(**Programme for International**

Student Assessment: PISA) 2018 の結果が今年得られる。OECD のデータでは、教育投資が GDP の 5%が加盟国平均、日本の教育への投資は 3.5%であるが、日本はいつも PISA では上位にあり、Andreas Schleicher OECD 教育・スキル局長は、日本に注目している。次の 2021 年の PISA では、SDGs、ESD が関係してくる。UNESCO スクール、OECD の PISA を考慮し、現場の先生を入れて FE の教育人材育成をやっていく必要がある。

- ・山形委員：海洋教育小委員会をつくって、民間の財団の企画とダブらせて公式に活動してはどうか。海洋はできると思う。
- ・田中委員：海洋教育小委員会を考えている場合、FE に結集できる。子供たちに学問の面白さを教える教育プログラムと結び付けて、海洋教育を担っていくように、NPO、NGO の資金を使って協働していくことはできないか。ここではモデルを示すことが重要である。

以上の議論を踏まえ委員長より次の提案があり、了承した。

- ・Bottom up で進めていくのには小委員会が有効である。そこで、当分科会に次の 2 つの小委員会を設置する。
 - ・海洋教育・FE 小委員会（仮称）委員候補：日置（世話人）、山形、窪川、ほか
 - ・ESD-SDGs 小委員会（仮称）委員候補：小金澤（世話人）、氷見山、山口、ほか
- ・世話人は 5 月 28 日までに小委員会設置提案書（案）と小委員会委員予定者名簿を委員長に提出し、委員長はそれを親委員会に付議し、了承を得る。なお小委員会委員の人数の上限は 15 名とする。予定ではその後学術会議の幹事会(6 月 28 日)の承認を得て発足となる。
- ・氷見山委員長：ワークショップ、シンポジウムについては次回の委員会で内容を詰め、秋に実施する方向で考える。当面提言は想定せず、前期と同様に『学術の動向』の特集を目指す。

7) その他

次回の委員会の開催時期は、7 月 9 日の週、あるいは 7 月 16 日の週とすることにした。

以上